

奈の良

第15号

奈良県と中国陝西省・韓国忠清南道 ゆかりの地



友好提携10周年記念特別号

奈良県と中国陝西省及び韓国忠清南道が

友好提携 10周年を迎えました!

奈良県は、中国陝西省・韓国忠清南道と2011年にそれぞれ友好提携を締結してから、2021年で10周年を迎えます。今回の『奈の良』第15号では、今までの交流や両省道の紹介、奈良県内にある中国・韓国とのゆかりの地を紹介します。

目次

これまでの交流	1p	薬師寺	8p
中国陝西省・韓国忠清南道の紹介	2p	飛鳥寺	9p
平城京	3p	高松塚古墳・高松塚壁画館	10p
御蓋山	4p	石舞台古墳・甘樫丘	11p
正倉院・奈良国立博物館	5p	飛鳥資料館	12p
唐招提寺	6p	法隆寺・中宮寺	13p
高松塚古墳・キトラ古墳	7p	元興寺・般若寺	14p

これまでの交流

両省道とはこれまで、知事の相互訪問や、次世代を担う青年の交流、文化財保護などの専門分野における交流、東アジア地方政府会合など、多様な交流を重ねてきました。

奈良県友好交流を担う次世代養成事業

平成25年から、国際交流や異文化理解に関心のある奈良県青年が両省道などを訪問し、現地学生との交流や奈良とのゆかりの地の視察などを通して交流を深めてきました。



韓日文化キャラバンin奈良

駐日韓国大使館、忠清南道と共催で、令和元年に初めて奈良県で開催しました。両国の伝統公演のステージなどを通して、約1,500人の来場者が文化交流を楽しみました。



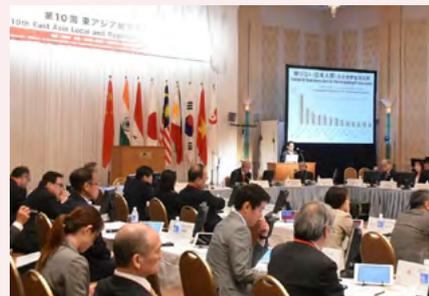
専門分野交流

平成26年から、檀原考古学研究所の研究者を陝西省の西北大学へこれまで6回派遣し、文化財保護などの専門分野における技術交流を行い、人脈を構築してきました。



東アジア地方政府会合

平成22年から開催している東アジア政府会合に、両省道からも参加し、地方政府が抱える共通の課題解決に向けて議論を深めてきました。



中国陝西省はどんなところ？

中国陝西省は、中国のほぼ中央に位置しており、面積約 205,800 km²、人口約 3,864 万人 (2019 年時点)、からなる省です。また、かつて隋や唐の都・長安が置かれていた「中国のシルクロード起点の地」として、歴史文化資源に非常に恵まれています。

代表的なものとしては、世界文化遺産にも登録されている「シルクロード：長安 - 天山回廊の交易路網」の構成資産の一つでもある玄奘三蔵ゆかりの大雁塔^{だいがんとう}や「秦始皇帝陵及び兵馬俑坑^{へいばようこう}」があります。また、その他、長安城の古城



陝西省 秦始皇帝陵及び兵馬俑坑

壁など、今もなお国内外から多くの観光客が訪れる史跡が省都・西安だけでなく、省内に数多く存在しています。

一方、西安は近年、物流の拠点として発展を遂げており、特に、西安港は中国国内最大の国際内陸港で、西安から鉄道でヨーロッパまでつながっています。

現代においても、いにしへの歴史や文化と共存しながら発展を遂げているところは、奈良との共通点の一つではないでしょうか。



陝西省西安市 古城壁

韓国忠清南道はどんなところ？

韓国忠清南道は、韓半島の中西部に位置しており、面積約 8,226 km² (2018 年時点)、人口約 212 万人 (2020 年時点)の都市です。

忠清南道は百濟 (紀元前 18 ~ 660 年) の都が置かれていた地として有名で、百濟の都は現在の公州市にある熊津^{コンジュ ウンジン}から、現在の扶余郡の泗沘^{フヨ サピ}へと移り、泗沘は百濟最後の都となりました。

道内に現存する公山城^{コンサンソン}、宋山里古墳群^{ソンサンリ}、定林寺址^{チョンリムサジ}など

百濟時代の歴史文化遺産から構成される「百濟歴史遺跡地区」は、ユネスコ世界文化遺産に登録されています。

このように歴史的な遺産が多く残っているだけでなく、国内外屈指の製造会社が忠清南道内に位置し、製造業、ハイテク産業が発達しています。また、農漁業及び畜産業が活発で、主な特産品には、高麗人参、いちご、海苔、韓牛等があります。



公州 宋山里古墳群



扶餘 定林寺址

奈良と中国をつなぐゆかりの地を訪れる

奈良県と中国陝西省が 2011 年に友好提携を締結して 10 周年を迎える記念の年です。これから奈良県内にある奈良と中国とのゆかりの地、特に陝西省とのゆかりを中心にをご紹介します。

平城京

唐・長安城の影響を色濃く受けた奈良時代の都

奈良時代(710～784年)に都が置かれた平城京は、当時、もっとも文化の進んでいた唐の都である長安城(現在の陝西省西安市)をモデルに作られました。

長安城との類似点としては、①宮殿の位置 ②園林を作る宮殿建設の思想 ③機能毎の建築物の配置 ④唐三彩の技術を導入した緑釉瓦りよくゆうがわらの使用などがあり、中国の影響が色濃く残るゆかりの地と言えます。



朱雀門前の著者

一方で平城京と長安城には違いもあり、最も大きな違いとしては、城壁の有無が挙げられます。長安城には城壁が設けられていましたが、平城京には設けられませんでした。現在でも、陝西省西安市には全長(中心線)約 13.7 km、高さ約 12m、幅約 12~14 mにも及ぶ古城壁が残っており、今もなお観光客や西安市民が多く訪れます。



陝西省西安市 古城壁
(写真提供:陝西省人民对外友好協会)

平城京の現在

平城京の宮殿地区である平城宮跡は、1952年に、特別史跡に指定されました。1959年から現在に至るまで約60年間にわたり、発掘調査が継続され、1998年には、平城宮跡を含む「古都奈良の文化財」がユネスコの世界文化遺産に登録されました。

2008年には、フーチンタオ胡錦濤国家主席(当時)が来県され、奈良県に「友誼之舟」と「鑑真和上の胸像」が贈呈されました。現在、それらは平城宮跡歴史公園の天平うまし館に展示され、多くの方々が見学に訪れています。

また、平城宮跡歴史公園の朱雀門ひろばには、長安に派遣された遣唐使らが乗った「遣唐使船」のレプリカが設けられています。



復原遣唐使船
(写真提供:県営平城宮跡歴史公園指定管理者)

私は、陝西省西安市の古城壁の上でサイクリングを楽しんだことがあります。また、2020年秋には、平城宮跡の凧揚げ大会に参加したこともあります。

両省県ゆかりの地である陝西省西安市の古城壁と奈良県の平城宮跡が1300年経った現在においても、私を含め、たくさんの方々の憩いの場として活用されているのは、非常に素晴らしいことだと実感しました。

平城宮跡歴史公園

- ・住所：〒630-8012 奈良県奈良市二条大路南 4-6-1
- ・アクセス：大和西大寺駅南口から徒歩約20分、バス停「朱雀門ひろば前」で下車



御蓋山(みかさやま)

阿倍仲麻呂が詠んだ歌に登場する御蓋山

奈良出身の遣唐使、阿倍仲麻呂（698～770年）といえば、百人一首の歌を思い出す方が多いかと思います。「天の原 ぶりさけ見れば 春日なる みかさの山に 出でし月かも」という阿倍仲麻呂が詠んだ日本への「望郷」の歌は、日本だけではなく、中国でも有名です。

遣唐使とは、中国の唐（618～907年）に派遣した使節のことで、当時の先進国であった唐の文化や制度を現地で学び、日本へ広める大きな役割を果たしました。

阿倍仲麻呂は、遣唐使の代表的な人物で、717年に唐の長安（現在の陝西省西安市）へ留学し、唐の官僚になり、753年にようやく唐の皇帝に帰国を許された時に詠んだのが、この一首です。その後、日本への帰国を試みた阿倍仲麻呂でしたが、結局、叶うことはなく、唐の地で亡くなりました。



阿倍仲麻呂歌碑(春日大社)

奈良県内には「三笠山」と「御蓋山」の2つの「みかさやま」がありますが、阿倍仲麻呂が詠んだのは「御蓋山」のことであると言われています。かつて遣唐使は唐への渡航の前に、御蓋山に向かって航海の安全を祈りました。春日大社の創建神話の舞台でもある御蓋山は現在、内部に入ることが禁じられています。



後方の明るい山が御蓋山(みかさやま)

陝西省と奈良県に建てられた阿倍仲麻呂の歌碑

陝西省西安市の興慶宮公園（唐長安城「興慶宮」の遺跡に造られた公園）には、「阿倍仲麻呂記念碑」があり、多くの方が見学に訪れます。

奈良県では、陝西省との友好交流の一環として、国際交流等に関心のある奈良県青年が陝西省を訪問する「友好交流を担う次世代養成事業」を行っており、毎回ホストファミリーとともに阿倍仲麻呂記念碑を訪れています。



2019年度次世代養成事業で訪れた阿倍仲麻呂記念碑前での記念写真

奈良県内にも阿倍仲麻呂の歌碑がいくつかあります。今回はその中でも、私が巡った3カ所の歌碑を紹介します。1つ目は、春日大社（奈良市）にある歌碑です。歌にゆかりのある春日大社に歌碑がないことを残念に思う篤志家が、2015年に歌碑を奉納しました。2つ目は、阿倍仲麻呂の生誕地といわれている安倍文殊院（桜井市）にあります。そして、奈良時代の「平城京」の朱雀門から4 km南にある羅城門跡公園（大和郡山市）にも歌碑が建てられています。

日中交流に多大な貢献を果たした阿倍仲麻呂に対する想いは、中国人でも日本人でも同様であることに大変感心しました。また、歌碑を巡ったことで、「望郷」の思いを一層深く理解することができました。

春日大社

- ・住所：〒630-8212 奈良県奈良市春日野町 160
- ・アクセス：奈良交通バスで春日大社本殿行「春日大社本殿」下車すぐ。



陝西省興慶宮公園

- ・住所：陝西省西安市碑林路咸宁西路 55 号

正倉院

シルクロードの東の終着点にある正倉院

正倉院とは、奈良市の東大寺大仏殿の近くに位置する校倉造の大規模な高床式倉庫のことです。奈良時代や平安時代、官庁や大寺院には、正倉と呼ばれる穀物や財物を保管するための倉庫がありました。しかし、そのほとんどは歳月の経過とともに亡んでしまい、現存する東大寺の正倉が「正倉院」と呼ばれるようになりました。



正倉院正倉外観
(写真提供:正倉院正倉)

東大寺の正倉院には、聖武天皇の妻である光明皇后が聖武天皇の遺愛品などを東大寺の本尊盧舎那仏（大仏）に捧げ、その品々を正倉に収蔵したことに由来し、9000 件にも及ぶ品々が収蔵されており、それらは正倉院宝物と呼ばれています。その宝物には、日本国内の宝物だけでなく、大陸から持ち込まれた品々もあり、中には、シルクロードを通じて、唐の都の長安（現在の陝西省西安市）よりさらに西のペルシャや天竺（インド）などからもたらされた宝物も含まれています。

奈良国立博物館

世界有数の仏像の殿堂

奈良国立博物館は、1895 年に開館し、東大寺や春日大社などに囲まれた奈良公園の中に位置しています。

奈良国立博物館では、多種多彩な展覧会やギャラリー、公開講座、ボランティア解説活動等を実施しており、収蔵品の中には、陝西省西安市の宝慶寺から伝来した三尊仏龕などのほか、中国から伝来したものも多く含まれています。

同館が開催する数ある展覧会の中でも、特に、数十件程度の正倉院宝物が年に一回、一般に公開される「正倉院展」はとても人気が高く、1946 年から始まった正倉院展には、毎年 13 万人以上もの観覧者が来場し、2019 年には、累計観覧者数が 1 千万人に達しました。正倉院展は、奈良国立博物館の象徴的な展覧会であり、日本だけではなく、最近では中国でも知名度が高まっています。



三尊仏龕(さんぞんぶつがん)
(写真提供:奈良国立博物館)

私は休日を利用して、2019 年 10 月に開催された「第 70 回正倉院展」の解説ボランティアとして、唐から伝来した宝物を含む全 56 件の正倉院宝物について解説を行いました。外国人の私にとって、日本語で正倉院展の説明をすることは大変でしたが、中国出身の私には、感慨深いものがありました。

長安と奈良のシルクロードを介したつながりのように、これからも古代からつながってきた交流のバトンを次世代へと引き継いでいきたいと思います。



ボランティア当日の著者

正倉院正倉

- ・住所：〒630-8211 奈良県奈良市雑司町129
- ・アクセス：近鉄奈良駅から徒歩約18分

奈良国立博物館

- ・住所：〒630-8213 奈良県奈良市登大路町50
- ・アクセス：近鉄奈良駅から徒歩約15分、市内循環バス「氷室神社・国立博物館」下車すぐ



唐招提寺

唐から渡来した鑑真和上が創建した律宗の名刹

唐招提寺は、奈良市西ノ京にある律宗の名刹で、唐から渡来した鑑真和上（688～763年）が創建したお寺として広く知られています。鑑真和上は中国の揚州出身で、20～26歳の頃、唐の首都である長安（現在の陝西省西安市）の實際寺や浄業寺での修行などを通じて、建築・彫刻・医薬学・書道等多岐にわたる分野において、当時、最も進んでいた唐の文化を学んだと言われています。



西安 浄業寺
(写真提供:浄業寺)

その後多くの苦難の末、日本に渡来した鑑真和上は、僧侶以外にも、優れた職人や芸術家たちを同行させ、多くの漢方薬や工芸品などを日本にもたらしました。また、唐招提寺の建立においても、鑑真和上の影響は大きく、伽藍配置や建築技術、三彩瓦を始めとする建築材料等、境内の随所に唐の影響が見られます。南大門に掛けられている扁額（寺院の門などの高い位置に掲出される看板）は、当時としては珍しく行書体で「唐招提寺」と書かれており、初唐の影響を受けたものとされています。



唐招提寺 金堂
(写真提供:一般財団法人 奈良県ビジターズビューロー)

日本の文化発展にも大きく寄与した鑑真和上は、中国でも非常に有名な偉人の一人で、鑑真和上への敬意を表すために、今も多くの中国人観光客が唐招提寺を訪れます。また、鑑真和上の命日にあわせて行われる鑑真和上坐像開扉（毎年6月5日～7日）には、多くの人々が参拝しており、鑑真和上は今なお日中両国の人々から尊敬されています。



国宝 鑑真和上坐像
(写真提供:飛鳥園)

最後に、唐招提寺にまつわる日中友好のエピソードを紹介したいと思います。

8世紀前半、仏教に深く帰依していた長屋王は、「山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結来縁」（「国は異なるが天は同じ。袈裟を僧侶に寄進し縁を結ぼう」という意味）という漢詩を縫い込んだ千枚の袈裟を唐に寄進し、そのうちの1枚を手にした鑑真和上は、その漢詩に込められたメッセージを読み取り、日本に渡る決意を固めたと言われています。

唐招提寺では、鑑真和上にもゆかりの深い浄業寺などに漢詩を縫い込んだ袈裟（右の写真）を贈る取り組みを2017年から始めました。

日中両国の寺院間の交流が、千年以上経った現在でも続いているということは、まさに鑑真和上が蒔いた“日中友好”という種が着実に実っていることの現れだと実感しました。



唐招提寺

- ・住所：〒630-8032 奈良県奈良市五条町 13-46
- ・アクセス：バス停「唐招提寺」で下車



高松塚古墳・キトラ古墳

国宝に指定されている古墳壁画

高松塚古墳は、奈良県明日香村にある古墳で、1972年にはその石室において、日本で初めて極彩色の壁画が発見されました。1983年には、同じく明日香村にあるキトラ古墳でも、国内2例目となる極彩色の壁画が発見されました。両古墳の壁画には、青龍、白虎、朱雀※、玄武という古代中国の神話に出てくるめでたい動物が描かれており、古代中国の影響を受けていたことを物語っています。

※ 高松塚古墳の朱雀は、盗掘時に破壊されたため、確認できていません。



高松塚古墳壁画 西壁女子群像（模写）
（公財）古都飛鳥保存財団 提供

特に高松塚古墳は、日本で初めて発見された極彩色の壁画古墳だったこともあり、発見当時は大きな話題となりました。

この発見をきっかけに古代史に興味を持つ人が急増し、西壁の「女子群像」などを描いた記念切手が発売されるほどでした。



陝西省 乾陵（外観）
（写真提供：中国駐大阪観光代表処）

日中の文化的つながり

一方、中国の古都・長安のあった陝西省にも、多くの古墳があります。そのうち、1960年から1962年に発掘された永泰公主墓に描かれている「仕女図」は、高松塚古墳西壁に描かれている「女子群像」と構図や持ち物がよく似ていることから、当時の唐と日本の間に文化的つながりがあったと考えられています。



永泰公主墓 仕女図（乾陵博物館）
（写真提供：陝西省人民対外友好協会）

奈良県と陝西省の交流は現在も続いており、2014年から奈良県立橿原考古学研究所と陝西省の西北大学との間で、考古学や保存科学などの専門分野における研究交流を行っています。これまでに日中両国合わせて10名以上の研修員の相互派遣が行われています。私も通訳・翻訳などのサポートを通じて、この事業に微力ながらも携われていることに誇りを感じています。

このような専門家交流を通じて、日本と中国の古くからの文化的つながりを感じられるような貴重な発見があることを楽しみにしています。

高松塚古墳

- ・住所：〒634-0144 奈良県高市郡明日香村大字平田444
- ・アクセス：近鉄飛鳥駅から徒歩15分、バス停「高松塚」から徒歩10分



キトラ古墳壁画体験館 四神の館

- ・住所：〒634-0134 奈良県高市郡明日香村大字阿部山67
- ・アクセス：近鉄壺阪山駅から徒歩12分



玄奘三蔵ゆかりの薬師寺

奈良市西ノ京にある薬師寺は、飛鳥時代に創建、奈良時代に平城京に移建された寺院で、南側の「白鳳伽藍」と北側の「玄奘三蔵院伽藍」から構成されています。世界文化遺産である薬師寺といえば、国宝の東塔などがある南側の「白鳳伽藍」が一般的には有名ですが、今回は北側の「玄奘三蔵院伽藍」を紹介したいと思います。



玄奘塔

(写真提供:一般社団法人奈良県ビジターズビューロー)

法相宗と玄奘三蔵院伽藍

法相宗の大本山の一つでもある薬師寺は、日本でも有名な「西遊記」に登場する三蔵法師のモデルとしても広く知られている玄奘三蔵(602～664年)にゆかりのある寺院です。

法相宗は玄奘三蔵の弟子である唐の慈恩大師(632～682年)が開いた宗派で、653年に入唐し、玄奘三蔵に師事した道昭(629～700年)をはじめ、唐で学んだ僧により日本にもたらされました。

玄奘三蔵は17年にも及ぶインド・ナーランダ寺院への求法(仏の教えや悟りの道を求めること。)の旅を経て、多くの経典を唐の都・長安に持ち帰りました。漢訳した経典の中には、大乘仏教の集大成とされる「大般若経」や、今日でも多くの日本になじみのある「般若心経」が含まれていました。薬師寺では、玄奘三蔵の遺徳を後世に伝えるべく、1991年に「玄奘三蔵院伽藍」が建立され、その中央にある玄奘塔には玄奘三蔵のご遺骨が納められ、玄奘三蔵訳経像が祀られています。

大唐西域壁画

それ以外にも玄奘三蔵を感じられる場所があり、その一つとして玄奘塔の北側にある大唐西域壁画殿が挙げられます。



大雁塔のそばに立つ玄奘三蔵像
(写真提供:中国駐大阪観光代表処)

大唐西域壁画殿には、平山郁夫画伯が約20年をかけ、約4000枚のスケッチを基に創作した「大唐西域壁画」の世界が広がっており、そこには、7場面13壁面、全長49mの壁画に、玄奘三蔵の旅の出発地である長安から目的地のナーランダまでの風景が描かれています。



大唐西域壁画 平山郁夫筆
(写真提供:薬師寺)

私は初めて大唐西域壁画殿を見学し、その壮大さに胸を打たれました。また、その中には、玄奘三蔵がナーランダから持ち帰った経典の翻訳を行った慈恩寺(陝西省西安市)の大雁塔も描かれており、まさか奈良で母国の大雁塔の絵を見ることができるとは思っていなかったため、驚いたのと同時に、奈良と陝西省のつながりを強く感じました。

薬師寺を参拝する機会があれば、玄奘三蔵の偉業に触れることができる「玄奘三蔵院伽藍」をぜひとも見学してみてください。

薬師寺

- ・住所：〒630-8563 奈良県奈良市西ノ京町457
- ・アクセス：近鉄西ノ京駅から徒歩1分、バス停「薬師寺」から徒歩4分



奈良と韓国をつなぐゆかりの地を訪れる

奈良は古代から韓国と深い繋がりがあり、今も奈良県内には日韓交流の痕跡と見られる場所が多く残されています。昔、韓半島から日本に渡り、土器製作、農工技術、土木技術、機織り、漢字、仏教などの新しい文化や技術を日本に伝えた人々を「渡来人」と呼びます。特に、4世紀から7世紀には高句麗、百済、新羅、伽耶から日本に渡ってきた「渡来人」が多くいました。「渡来人」は、7世紀の飛鳥文化の形成に大きな影響を与えたと言われています。そういう意味で「飛鳥地域（現在の明日香村周辺）」は、「渡来人の第二の故郷」とも言えるでしょう。

今年、奈良県と韓国忠清南道が2011年に友好提携を締結して10周年を迎える記念の年です。これから奈良県内にある奈良と韓国とのゆかりの地、特に忠清南道とのゆかりを中心にをご紹介します。

飛鳥寺

百済の技術者たちが建立に携わった日本初の仏教寺院

飛鳥寺は、日本書紀によると、588年に蘇我馬子（？～626年）が建立を発願し、596年に完成したとされる日本最初の本格的仏教寺院です。飛鳥寺の建立には、百済から派遣された僧侶や仏師、寺工、鑪盤博士、瓦博士が携わったという記録があります。

また、日本最初の本格的伽藍配置によるお寺と言われています。飛鳥寺の伽藍配置は、塔を中心としてその東・北・西に金堂を置く様式です。この配置は、高句麗の清岩里寺址、新羅の皇龍寺址などで見られる様式です。

飛鳥寺の本尊である銅造釈迦如来坐像（飛鳥大仏）は、7世紀初期に渡来系の仏師・鞍作止利により造られた日本最古の仏像です。



飛鳥寺入口(正面)

現在の飛鳥大仏は、平安・鎌倉時代の大火災により全身罹災し、補修を受けたものですが、面長な顔立ちやアーモンド形の目元から飛鳥彫刻の特色が見られます。



飛鳥大仏

現在、飛鳥寺は1987年から韓国忠清南道礼山郡の修徳寺と結縁し、姉妹寺院の関係にあります。飛鳥寺では、修徳寺との姉妹結縁に関する資料や交流の写真、韓国語で書かれた般若心経等も見ることができます。



修徳寺との姉妹結縁
関連資料



韓国語で書かれた
般若心経

飛鳥寺には、昔からのつながりを感じられるものがたくさん残っており、とても感動しました。そして、これからもこのような奈良と韓国の交流が続いていくことを願っています。皆さんもぜひ飛鳥寺を訪れてみてはいかがでしょうか。

飛鳥寺

- ・住所：〒634-0103 奈良県高市郡明日香村飛鳥 682
- ・アクセス：近鉄橿原神宮前駅東口よりバス停「飛鳥大仏前」で下車

高松塚古墳・高松塚壁画館

壁画に見られる文化的繋がり

奈良県明日香村にある高松塚古墳は、1972年に橿原考古学研究所の調査により、国内で初めて石室内に極彩色の壁画が発見された日本を代表する壁画古墳の一つであり、その壁画は国宝にも指定されています。また、2005年の発掘調査により、藤原京期(694～710年)のものと確定されましたが、被葬者は特定されていません。



高松塚古墳

壁画は石室の東壁・西壁・北壁・天井の4面に存在し、切石に厚さ数mmの漆喰を塗った上に描かれています。東壁には四神のうちの青龍、日、男子群像、女子群像が描かれ、西壁には四神のうちの白虎、月、男子群像、女子群像が描かれています。



高松塚古墳壁画、西壁女子群像(模写)
(公財) 古都飛鳥保存財団 提供

また、北壁には四神のうちの玄武が描かれ、天井には星宿図が描かれており、円形の金箔で星を表し、星と星の間を朱の線でつないで星座を表しています。

壁画の中でも西壁の「女子群像」は色彩鮮やかで、「飛鳥美人」の名でも親しまれています。また、その構図や人物群像の服装や持ち物が、高句麗の水山里古墳(北朝鮮)や唐の永泰公主墓(中国)などに似ていると言われています。さらに、女性の服装から和風の要素もみられることから、当時の高句麗、唐と日本に文化的な繋がりがあったと考えられています。

現在、壁画は年に数回のみ公開されていますが、古墳に隣接している「高松塚壁画館」では発見当時の壁画を忠実に写し取った現状模写を見ることができます。また、模写壁画だけでなく、石槨の模型や副葬品の模造などが展示されており、高松塚古墳についてさらに詳しく知ることができます。



高松塚壁画館内部(展示の様子)

高松塚古墳は、1400年も前の壁画や出土品から、昔の日本と韓国、中国とのつながりが分かる貴重な歴史的・文化的遺産です。明日香村を訪れた際には、高松塚古墳と高松塚壁画館に足を運んでみるのはいかがでしょうか。

高松塚壁画館

- ・住所：〒634-0144 奈良県高市郡明日香村大字平田 439 (国営飛鳥歴史公園内)
- ・アクセス：近鉄飛鳥駅より徒歩 15 分



- ・高松塚古墳ホームページ

<https://www.asuka-park.go.jp/area/takamatsuzuka/tumulus/>

- ・高松塚壁画館ホームページ

<http://www.asukabito.or.jp/hekigakan.html>



石舞台古墳

季節によって様々な雰囲気が楽しめる古墳

国営飛鳥歴史公園内石舞台周辺地区の中央には、30 数個の岩で造られた巨大な古墳「石舞台古墳」があります。被葬者は不明ですが、6 世紀後半から 7 世紀初頭の権力者である蘇我馬子の墓ではないかと言われています。



石舞台古墳

石舞台古墳は、玄室の長さ 7.7 m、幅約 3.5 m、高さ 4.7 m、岩の総重量約 2300 t で、その大きさから築造当時の優れた土木技術や運搬技術がうかがわれます。また、墳丘の盛土が失われ、巨大な両袖式の横穴式石室が露出しているのが特徴的で、墳形は、方墳又は上円下方墳であると推測されています。



石舞台古墳石室入口

上円下方墳は、百濟時代の最も一般的な古墳の墓制と言われているため、石舞台古墳も百濟の石室の影響を受けたものと考えられます。石室の中には入ることができるので、私も実際に入ってみました。その巨大さと迫りに圧倒されました。前述のとおり、被葬者は明らかになっていませんが、当時、大きな権力を持っていた人物の墓であったことが想像できます。

また、春夏秋冬で違う景色を楽しむことができます。特に春には周辺に桜が咲き、とても綺麗です。季節によって様々な雰囲気が楽しめる石舞台古墳にぜひ足を運んで、古代飛鳥の歴史の息吹を感じてみてはいかがでしょうか。



春の石舞台古墳
(写真提供:明日香村教育委員会)

石舞台古墳

- ・住所：〒 634-0112 奈良県高市郡明日香村島庄 133
- ・アクセス：バス停「石舞台」で下車して徒歩 3 分
<https://www.asuka-park.go.jp/area/ishibutai/tumulus/>



甘樫丘(甘樫丘展望台)

春の明日香村はここもお勧め！

飛鳥の中心にある標高 148 m の緩やかな丘「甘樫丘」では、明日香村や藤原宮跡が一望できます。また、遠くには大和三山と呼ばれる香具山（万葉集では天香具山と詠われています。）・畝傍山・耳成山を眺めることもでき、付近一帯は飛鳥歴史公園甘樫丘地区として整備されています。

古代の人々が、この丘に登り、飛鳥の風景を眺めながら詠んだ数多くの歌が万葉集に残っており、今でも万葉集に詠まれた桜やスモモの花などの万葉植物が植えられています。皆さんも甘樫丘に登り、飛鳥の景色を楽しみながら、昔の飛鳥人になった気分を味わってみてください。



甘樫丘から眺めた風景
(写真提供:国営飛鳥歴史公園)

甘樫丘

- ・住所：〒 634-0107 奈良県高市郡明日香村大字豊浦
- ・アクセス：バス停「甘樫丘」で下車して徒歩 10 分

1400年前の飛鳥を近くに感じる

飛鳥は、今から1400年前、約100年にわたって都が置かれ、日本の国家や文化の基礎が作り上げられた場所であり、大陸からの新しい文化や技術をもとに、「日本ではじめて」のものがたくさん生まれた場所であると言われています。

奈良県明日香村にある飛鳥資料館では、飛鳥の歴史と文化を紹介しており、現在の明日香村に残る「飛鳥」の姿を見ることが出来ます。

今回は、飛鳥の歴史や韓国とのゆかりについてさらに知るため、飛鳥資料館の方にお話を伺いました。

飛鳥資料館の方へのインタビュー

Q1. 飛鳥資料館では年に何回か特別展を開催されているとのことですが、主にどのようなテーマの展示をされていますか。

A1. 年に1～2回、春秋に特別展をします。高松塚古墳や飛鳥の石造物などの定番のテーマに加え、飛鳥の古写真や古地図など、様々な切り口から飛鳥を紹介してきました。



「よみがえる飛鳥の工房—日韓の技術交流を探る—」
展示室の様子

Q2. 2018年から「よみがえる飛鳥の工房—日韓の技術交流を探る—」という特別展を開催されていますが、この特別展を企画した理由を教えてください。また、展示物や文献等の中で、特に日韓交流の証や昔からの関係性等がよく分かる物はありますか。

A2. 飛鳥池工房遺跡の調査成果をご覧いただける展示を企画しました。出土品を展示するだけでなく、奈良文化財研究所と韓国国立文化財研究所の共同研究の成果などをもとに、

日韓の文化交流や技術交流の実態を紹介することで、より広い視野から飛鳥の歴史を紹介しました。

日韓の交流を示す例の一つに、ガラスの製作技術が挙げられます。飛鳥池工房遺跡からはガラスの材料を溶かすための「坩堝」が出土しています。この坩堝の形は、実は韓国・百済の王宮里遺跡や弥勒寺跡のガラス工房から出土した坩堝ととても良く似ています。百済と飛鳥のつながりを感じさせる資料です。

Q3. 明日香村には韓国とゆかりがあるところが多く残っており、特に飛鳥寺や高松塚古墳がよく知られていますが、その他にもゆかりがある場所や遺跡等がありますか。

A3. 飛鳥資料館で展示している山田寺東回廊では、大陸から伝わった寺院建築技術を見ることができます。寺院を造る技術、例えば地盤の改良や石材の加工、瓦を焼いたりする技術は大陸から伝えられたものです。

また、飛鳥に点在する猿石や亀石などのユーモラスな石造物も、韓国ゆかりの技術でつくられたとする説があります。

Q4. 近年行われている飛鳥についての調査にはどのようなものがありますか。また、今後、実施予定の展示やイベントなどがあれば教えてください。

A4. 飛鳥地域の出土品の調査を継続的におこなっています。また、飛鳥地域の景観変遷を明らかにするため、古写真や古地図、集落踏査などの調査もおこなってきました。その成果の一部は、「あすかの原風景」、「飛鳥—自然と人と—」などの特別展で公開しました。これらの展示会の図録は、現在も入手可能なので、興味のある方はぜひご覧ください。

さらに、所蔵する瓦も継続的に調査しております。その成果の一部は、令和3年度の秋の特別展でご紹介する予定です。飛鳥は日本最初の本格的寺院がつくられた地であり、瓦の変化からは、日本に仏教が広まっていく過程もみることが出来ます。ぜひ秋の特別展にご期待ください。

最後に…

飛鳥資料館では、教科書でもおなじみの富本銭の実物や、高松塚古墳石室の模型などを見ることができます。ぜひ、飛鳥めぐりの最初に、飛鳥資料館で飛鳥時代の政治や文化の実態を学び、それから明日香村をめぐっててください。明日香村の農村風景が、日本のはじまりの歴史を秘めた、かけがえのない眺めだということが実感できると思います。

飛鳥資料館

・住所：〒634-0102 奈良県高市郡明日香村奥山601

・アクセス：バス停「飛鳥資料館」で下車

<https://www.nabunken.go.jp/asuka/>



法隆寺

仏教建築や仏教美術に見られる文化的繋がり①

奈良県斑鳩町にある法隆寺は、百済から仏教が公伝した後、仏教を広め、国の礎を築いた聖徳太子ゆかりの寺院です。601年、聖徳太子が斑鳩の地に斑鳩宮を造営し、607年頃、その近くに亡き父・用明天皇のために建立したのが法隆寺（斑鳩寺）だと言われています。『日本書紀』によると、670年に創建時の伽藍は焼失したとされ、その後間もなく再建されたと考えられています。また、法隆寺と法起寺は、1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」として、姫路城とともに日本で初めて世界文化遺産に登録され、現存する世界最古の木造建築物群としてよく知られています。



法隆寺

西院伽藍最古の建築である金堂には、中の間に国宝・釈迦三尊像、東の間に国宝・薬師如来像、西の間に重文・阿弥陀三尊像がそれぞれ安置されています。釈迦三尊像は、渡来系の鞍作止利により造られたものであることが光背の裏面に刻まれています。

また、大宝蔵院に安置されている国宝・百済観音や玉虫厨子は、日本の仏教美術を代表するものとしてよく知られています。百済観音は、どこで制作されたのかが明らかではなく、日本国内で造られた可能性が高いとされていますが、その名前から百済とのゆかりを想起させます。また、玉虫厨子は、仏像を安置するための厨子を玉虫の美しく光る羽で装飾したことからその名がついたと言われており、玉虫を使った古代の工芸品は日本と韓国でしか確認されていないことから、当時、文化的な交流があったと考えられます。

法隆寺

- ・住所：〒636-0115 奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内1-1
 - ・アクセス：JR法隆寺駅より徒歩約20分、又はバス停「法隆寺参道」で下車
- <http://www.horyuji.or.jp>



中宮寺

仏教建築や仏教美術に見られる文化的繋がり②

法隆寺の近くには、聖徳太子が母である間人皇后のために建立したとされる中宮寺があります。本尊である国宝・木造菩薩半跏像は、韓国の国立中央博物館に收藏されている韓国の国宝・金銅弥勒菩薩半跏像とよく似ていると言われています。弥勒信仰が盛んだった韓半島で弥勒菩薩の半跏思惟像が造られるようになり、日本にもその文化が伝わったと考えられます。

また、中宮寺には、日本最古の刺繍として知られる、国宝・天寿国曼荼羅刺繍帳があります※。この刺繍帳は、聖徳太子が薨去され、御妃・橘大郎女が、宮中の采女達に命じ、太子が往生された天寿国という浄土の有様を刺繍させたものです。図中には、一匹の亀に四文字ずつ「部間人公」など文字であらわされ、四百字の銘文が刺繍されています。その全文は、『上宮聖徳法王帝説』に残っています。また、作者たちの名前に韓半島からの渡来人画工とみられる「高麗加世溢」の名前があります。

※本堂に安置されているものは複製で、実物は奈良国立博物館に寄託されています。



国宝 木造菩薩半跏像
(写真提供:奈良国立博物館)

このように古代から伝わる仏教建築や仏教彫刻などを通じて、昔から日韓の深い交流があったことが分かります。皆さんも斑鳩の地に建つ古代からのお寺、法隆寺と中宮寺に足を運んでみてはいかがでしょうか。

中宮寺

- ・住所：〒636-0111 奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺北1-1-2
 - ・アクセス：JR法隆寺駅より徒歩約15分、又はバス停「法隆寺参道」で下車
- <http://www.chuguji.jp>



元興寺

飛鳥時代に造られた日本初の瓦が残る寺院

奈良市内にある元興寺は、日本最初の本格的伽藍と言われる飛鳥寺（法興寺）が平城遷都にともない新築移転されたものです。

『日本書紀』には、飛鳥寺の建立に、百濟から僧侶や寺工、鑪盤博士、瓦博士、画工などの技術者が派遣されたと記されています。そのときの瓦博士が造った日本最初の瓦は、現在地にお寺が新築移転された際にも運び移され、極楽堂（本堂）と禅室の屋根に数千枚が現役で葺かれています。



極楽堂と禅室の屋根

1998年には、奈良市内にある8つの社寺で構成される「古都奈良の文化財」が世界文化遺産に登録され、その中に元興寺極楽坊境内の旧僧坊遺構である国宝・極楽堂と国宝・禅室が含まれています。



極楽堂と禅室

また、『三国仏法伝通縁起』によると、飛鳥寺（法興寺）に住したと言われる高句高句麗の僧侶・慧灌法師は、中国の僧侶である嘉祥大師（吉蔵）から三論を学んで来朝し、日本に初めて三論宗を伝えたとされます。

元興寺を実際に訪れて、先人の優れた技術が今も生き続けていることに感動しました。ぜひ皆さんも元興寺に足を運んでみてはいかがでしょうか。



元興寺

- ・住所：〒630-8392 奈良県奈良市中院町 11
 - ・アクセス：近鉄奈良駅より徒歩 15 分、又はバス停「福智院町」で下車して徒歩 5 分
- <https://gangoji-tera.or.jp>

般若寺

高句麗の慧灌法師が創建した歴史ある寺院

奈良市内には、高句麗から渡来した僧侶である慧灌法師により創建されたと伝えられている般若寺があります。般若寺は、春は山吹や桜、夏は初夏コスモスや紫陽花、秋はコスモスや彼岸花、冬は水仙など、四季折々の花が咲き、中でも夏と秋に咲くコスモスの名所として知られており、「コスモス寺」とも呼ばれています。コスモスと紫陽花が咲く6月に般若寺を訪れたことがあります。境内一面に咲くコスモスとガラスボールに紫陽花を入れた花手水が色鮮やかで、とても綺麗でした。

また、般若寺の楼門は日本最古の楼門として国宝に指定されています。この楼門は、平安時代末期の焼き討ちで焼失した伽藍を、鎌倉時代に再建した際に建立され、その後の戦乱による被害からも逃れて奇跡的に残ったものです。

皆さんも歴史あるお寺と四季を彩る花を見に行ってみませんか。



般若寺のコスモス(2020年11月撮影)

般若寺

- ・住所：〒630-8102 奈良県奈良市般若寺町 221
 - ・アクセス：バス停「般若寺」で下車して徒歩約 3 分
- <http://www.hannyaji.com>



な ら 『奈の良』とは

こんにちは。

私たちは奈良県国際課に勤務する国際交流員です。

奈良県と海外の交流を深める架け橋となるべく、日々、国際交流業務に従事しています。

『奈の良』は、外国人の目線で見えた奈良県の魅力を県民の方々や外国から来られたお客様に紹介するため、私たちが奈良県で見つけた魅力や面白いことについて自ら取材し、記事にしたものです。本誌が奈良県に興味を持つきっかけや外国人が感じる奈良の魅力を発掘する手がかりとなれば嬉しく思います。

編集後記

呉 春蘭 (Chunlan Wu)

中国の友人が奈良に来ると、ほとんどの人が「奈良は昔の中国と似ているね」と言います。私はこれまで唐招提寺を10回以上参拝しましたが、建物の配置など、中国と似ている点も、このお寺が大好きになった理由の一つです。

奈良には、唐招提寺のように唐の都・長安の雰囲気を感じられるゆかりの地が他にも多くあります。そのなかの一つである御蓋山^{みかさやま}を眺め、昨年^よの中秋節に、私が詠んだ歌をご紹介します。「みかさの夜 月餅食みつつ思いけり 仲麻呂の大和 私の長安」



唐招提寺 金堂の柱廊のそばにて

南 炫汀 (Hyunjung Nam)

奈良と韓国は昔から深い繋がりががあります。奈良県内には韓国とのゆかりの地がたくさん残っており、昔の国際交流の名残を見たり感じたりすることができます。

今回、『奈の良』の取材を通じて、書籍や写真でしか見たことがなかった奈良と韓国とのゆかりの地を実際に訪れ、見学することができて、とても有意義な機会となりました。読者の皆様も、古代の奈良の姿や先人たちの生活などを想像しながら、ぜひ奈良と韓国とのゆかりの地を巡ってみてください。



明日香村 石舞台古墳にて

友好提携 10 周年記念 HP

記念 HP では、両省道の紹介や、奈良県国際課に勤務する中国・韓国の国際交流員が、ゆかりの地を実際に取材し作成した記事など記念 HP でしか見られない情報を掲載しています。



QR コードまたは奈良県国際課 10 周年で **検索!**

Special Thanks

今回の取材にあたりご協力いただいた奈良県と中国陝西省・韓国忠清南道ゆかり地の関係者の皆様にお礼申し上げます。

『奈の良』

発行元：奈良県知事公室国際課

発行：令和3年9月

本誌に関するご意見、ご質問等はこちらへご連絡ください。

〒630-8501 奈良市登大路町30 奈良県知事公室国際課

TEL：0742-27-8477

FAX：0742-22-1260